

## 研究所年報 巻頭の言葉

富山医科薬科大学が「国立大学法人富山医科薬科大学」に移行し、法人化にともなった変化とえば、しきりと外部資金の獲得、特許に結びついた研究の奨励、企業人の受け入れや企業との共同研究の奨励など、一昔前ならば企業に癒着していると批判されたであろう事柄が常識化し、戸惑いの感じられる今日この頃である。和漢薬研究はどちらかと言えば地味な学問と考えられていたが、健康食品産業が和漢薬の素材に熱い関心を寄せており、韓国や欧米のベンチャー企業の研究所訪問も多くなってきている。また、ヒトの遺伝子発現やタンパク生成の網羅的解析が東洋医学の診断に応用できるか否かも、重大な関心事になりつつあり、先端科学との距離も徐々に縮まりつつある。

一方、欧米を中心にした complimentary and alternative medicine (CAM) の動きはアジアの伝統医学にも刺激となり、澳門での国際中医学会会議、韓国大邱での中・韓・日の国際東方医学会議の開催と西欧型の CAM に対抗して、アジアでのイニシアティブ確立を目指した動きが目立つようになっている。和漢薬研究所はどちらからも勧誘を受けありがたい事とは思いますが、クールな目で推移を見守っている状況である。

地域貢献の観点からは、今年度立ち上がった富山県の寄附講座「和漢薬製剤開発部門」(谿 忠人教授) はオリジナルブランド配置薬の蔘王 (パナワン) の開発に成功し、富山県配置薬業再興の切り札と目されている。研究所40年の歴史のなかでも特記すべき事と思われる。

本年度は門脇 真 (消化管生理学分野)、松本欣三 (複合薬物薬理学分野)、小松かつ子 (生薬資源科学分野) の新教授が誕生し和漢薬研究所の若返りが図られたが、今後の研究の発展を期待したい。また、平成17年10月に行われる富山県の3国立大学の合併を機に「和漢医薬学総合研究所」と研究所名を改める予定である。総合的観点から伝統医学の長所を解き明かし、現代医療に役立てることを理念とする研究所を目指すつもりである。

平成 16 年 12 月

和漢薬研究所 服部 征雄